目次

第一講　演習問題(1)……p.2
第二講　演習問題(2)……p.12
第三講　演習問題(3)……p.18
第四講　演習問題(4)……p.28

第一講　演習問題(1)

次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

唐土に侍りし時、人の語り侍りしは、昔、この国に卑しからぬ人ありけり。その家極めて豊かなり。

秋夜、高楼に登りて、月を眺めてありけるに、夜静まり、人寝さだまりて、音する物なし。かかりけるに、そこなりける馬と牛と、物語りをなんしける。馬のいふやう、「あな悲し、わびし。いかなる罪の報いにて、この人に使はれて、昼は日暮らしといふばかりに、かく使はれ居るらん。夜も、心よくうち休むべきに、*杖目ごとに痛くわびしく、あまり苦しくて、心のままにもえ休まず。明日また、[1]いかさまに使はれんとすらん。これを思ふにとにかくに寝(い)ねも安からず」といふ。また、牛のいふやう、「さればこそ。あはれ、悲しきものかな。我かかる身を受けたるとは思へども、さしあたりては、ただこの人の恨めしさ、するかたなく覚ゆる」といひけり。

これを聞くに、心もあられず悲しくて、妻と娘とにいふやう、「我は今夜忍びてこの家を出でんと思ふ事あり。かかるこ

と侍るぞや。今、あり経んままには、[2]かやうの事ぞ積るべき。財（たから）は身の敵（あた）にて侍るにこそ。この家をば捨てて、いづくともなく行きて、人もなからん所の、静かならんに行きて、[3]後世のこと思ひてあらむずるなり。そこたちはここに留まるべし」といひければ、二人の人のいふやう、「[4]誰を頼みてある身なればか残りては侍るべき。いづくにても、おはせん方に[A]慕ひ聞こえめ」といふ。「さらば、さにこそは侍るなれ」とて、親子三人、忍びに出にけり。

さて、遥かに行きて、思ひかけぬ山の麓に、庵、形のやうに構へて、*笊器（さうき）といふ物を日に三つ作りて、この娘にて売りに出だしける。[5]かくて世を渡りけるほどに、ある時、この笊器を買ふ人なし。むなしく帰りぬ。[6]また次の日の分、具して持て出でたれども、その日も買ふ者なし。また次の日の分具して、九の笊器を持て行きたりけれども、この日も買ふ者なし。娘、思ひ嘆きて、「かくてのみ日は重なる。我が父母の命も長らへがたかるべし。いかさまにせむ」と煩（わづら）ひけるほどに、道に銭を一貫落としたりけり。この娘、笊器をこの銭に結び付けて、笊器の価（あたひ）を数へて銭を取りて、残りの銭と笊器とをば、もとの所に置きて来にけり。

さて、[7]このよしを語りければ、父、大きに驚きていふやう、「何わざ営まんとて持ちたる銭にかあり[8]つらむ。親の物に

てもありつらむ、主の物にてもあるべし。たとひ取るにても、一つの笊器を置きて一つの価をこそ取るべけれ。いかなる者か、一人して笊器を九つ買ふことあるべき。[9]かかる濁りある心持ちたらん者は、疎ましく覚ゆ。早、みな持て行きて、もとの銭に貫き具して、ただ笊器を取りて来よ」といふ。娘、行きて見るに、この銭なほありければ、もとのままにして、笊器を取りて来て見れば、父も母も、ともに手を合はせて、頭を垂れて死ににけり。「あな、悲しのわざや。我もありては何かせん」とて、娘もそばに居て死ににけりとなん。

これを聞き侍りしに、あはれ尽くしがたく侍りき。まことに、さやうの心を持ちてこそ、仏の道をも願ふべきに、身にはわづかに道を学ぶやうにすれども、心は常に濁りに染みたらんは、定めて*三宝を欺く咎もあるべし。いかが侍るべからんと悲しくあぢきなし。かの昔の三人、今いかなる菩薩にて、いづれの仏の御国にかいまそかるらん。「願はくは、我が心をあはれみて、*念々に彼に等しからむと思ふ心を給へ」と、心の中に念じ侍りき。

さても、この人どもの姿をも、絵に描きて売るとぞ語り侍りし。すべて唐土は、かやうのことはいみじく情ありて、[10]亡き後までも侍るにや。この日本の国には、さやうの人の姿、買ふ者もよにあらじ。描きて売らんとする人も、また、稀なる

べきにや。

（『閑居友』による）

＊杖目＝杖で打たれた傷痕。
＊笊器＝竹で編んだ籠やざるの類。
＊三宝＝仏・法・僧のこと。
＊念々＝一念ごと、すなわち瞬間瞬間ごとに。

問一　傍線部1「いかさまに使はれんとすらん」の意味として最適なものを次の①～⑤から選べ。

①　どのように酷使されるのだろう。
②　きっと不正なことに使用されるのだ。
③　どのような人に仕えるのだろう。
④　どの方々に使われたいのだろう。
⑤　どのように使われればよいのだろうか。

問二　傍線部２「かやうの事ぞ積るべき」は、ここではどのようなことを言っているのか。最適なものを次の①～⑤から選べ。

① 牛や馬を大切にしないことで家族に不幸が続くこと。
② 悲しみのあまり隠れて家を出て行かなくてはならないこと。
③ 牛や馬の愚痴を毎晩聞かなくてはならないこと。
④ 様々なものからの恨みが重なってゆくこと。
⑤ 妻や娘が恨まれる日々が続くこと。

問三　傍線部３「後世のこと思ひてあらむずるなり」の意味として最適なものを次の①～⑤から選べ。

① 後の世代のことなどは思っていられないのだ。
② 来世のことを考えて過ごしたいのだ。
③ 後世に名を残そうと思っているのだ。
④ 後世の不名誉などを思って居たいのだ。
⑤ 来世のことなど思ってはいられないのだ。

問四　傍線部4「誰を頼みてある身なればか残りては侍るべき」の現代語訳として最適なものを次の①～⑤から選べ。

① いったい誰かを信頼している身になれば、残ることができるでしょうか。
② 誰かを頼りにして存在できる身の上ならば、残ることができるでしょう。
③ 他の誰かを頼りにすることができる身分なので、残って側にお仕えいたしましょう。
④ いったい誰を頼りとして生きている身で、ここに残ることができましょうか。
⑤ 誰も頼みにできない身になれるならば、残っていることもできるでしょうか。

問五　空欄 A に入る最適な助詞を記せ。

問六　傍線部5「かくて世を渡りける」の意味として最適なものを次の①～⑤から選べ。

① 親子三人の立派な住居を作り、娘の作った笊器を売る生活。
② 形通りに庵と笊器を作ってはあちこちを移動する世渡り。
③ 粗末な家に住んで、笊器を作って売る暮らし。
④ 遥かな山の麓に庵を作り、笊器を作ってさまよう生活。
⑤ 庵のような形の笊器を作り、娘を売りに出すような人生。

問七　傍線部６「また次の日の分、具して」のここでの具体的な意味として最適なものを次の①～⑤から選べ。

① 父と母を連れて。
② 合計九つの笊器を持って。
③ 牛と馬を伴って。
④ さらに多くの具材を携えて。
⑤ 六つの笊器を持って。

問八　傍線部７「このよし」の意味として最適なものを次の①～⑤から選べ。

① 道に落ちていた銭から、笊器九つ分の対価を得て帰ったこと。
② 道に銭を落としてしまい、笊器も全て置いてきたということ。
③ このまま笊器が売れない日が続くと家族全員が死んでしまうということ。
④ 道に銭が落ちていたので、それを持ち帰ったということ。
⑤ 笊器一つ分の代金を道に落ちていた銭から持ち帰ったということ。

問九　傍線部8「つらむ」の文法的説明として、最適なものを次の①～⑤から選べ。

①　「つ」は完了の助動詞の連用形、「らむ」は婉曲の助動詞の終止形。
②　「つら」は名詞、「む」は推量の助動詞の終止形。
③　「つ」は強意の助動詞の終止形、「らむ」は推量の助動詞の連体形。
④　「つ」は強意の助動詞の終止形、「ら」は完了の助動詞の未然形、「む」は推量の助動詞の終止形。
⑤　「つ」は完了の助動詞の連用形、「らむ」は伝聞の助動詞の連体形。

問十　傍線部9「かかる濁りある心」の意味として最適なものを次の①～⑤から選べ。

①　笊器を九つ買う人の身を考えないという商人にあるまじき心。
②　一つの笊器に相当する銭を持ち帰らないような心。
③　父母と自分が生き長らえるためには勘定をごまかしても構わないという心。
④　銭を落とした人の気持ちを思い遣ることができない心。
⑤　貧乏な暮らしに嫌気がさして、道に落ちている銭を盗んでくる心。

問十一 傍線部10「亡き後までも侍るにや」の意味として最適なものを次の①～⑤から選べ。

① 自分が死んだ後までも大事に思ってくれる人がいるのだろうかということ。
② その人達の没後も人徳を讃えるということがあるのだろうということ。
③ 全てがなくなったとしても崇高な精神は存在しているのだろうということ。
④ この世に無くなってしまった後にも存在し続けるものがあるのだということ。
⑤ 亡くなってしまった後にも側にいるものがあるだろうか、いやないのだということ。

問十二 『閑居友』は仏教説話集に分類されるが、次の①～⑤から仏教説話集を一つ選べ。

① 今鏡
② 日本霊異記
③ 文鏡秘府論
④ 山家集
⑤ 宇治拾遺物語

模範解答

第一講

〈模範解答〉

問一　①　問二　④　問三　②　問四　④　問五　こそ　問六　③
問七　⑤　問八　①　問九　③　問十　④　問十一　②　問十二　②

〈現代語訳〉

（私が）中国にいました時、人が語りましたことには、昔、この国に卑しくない人がいた。その家はとても裕福だ。

昨夜、高楼に登って、月を眺めていたところ、夜が静まり、人が寝静まって、物音がしない。このようだった時に、そこにいた馬と牛とが、話をした。馬が言うことには、「ああ悲しい、つらい。どのような罪の報いで、この人に使われて、昼は一日中というほどに、このように使われているのだろう。夜も、気持ちよく休みたいのに、杖で打たれた傷痕がひどく痛くてつらく、あまりにも苦しくて、思うとおりに休むこともできない。明日また、どのように酷使されるのだろう。これを思うととにかく安心して眠れない」と言う。また、牛が言うことには、「そのとおり。ああ、悲しいものだなあ。私はこのような身を授かったとは思うが、何はともあれ、ただこの人の恨めしさを、どうしようもなく思える」と言った。

これを聞くと、心をおさえられず悲しくて、妻と娘とに言うことには、「私は今夜こっそりとこの家を出ようと思うことがある。このようなことがございますのだ。今、年月を送ると、このように様々なものからの恨みが重なっていくはずだ。財産は身の敵であるようです。この家を捨てて、どこということもなく行って、人もいないような所で、静かな所に行って、来世のことを考えて過ごしたいのだ。あなたたちはここに留まるのがよい」と言ったところ、二人が言うことには、「いったい誰を頼りとして生きている身で、ここに残ることができましょうか。どこへでも（あなたが）いらっしゃる方へお慕い申し上げよう〔＝着いていきます〕」と言って、親子三人で、こっそりと出て行った。

さて、遠くまで行って、見知らぬ山の麓に、庵を、型通りに構えて、笊器〔＝竹で編んだ籠やざるなどの類〕を日に三つ作っ

て、この娘に売りに行かせた。このように粗末な家に住んで、瓫器を作って売る暮らしをしていたうちに、ある時、この瓫器を買う人がいない。むなしく帰った。また次の日の分を、一緒に持って〔＝六つの瓫器を持って〕出たが、その日も買う人がいない。また次の日の分を一緒に、九つの瓫器を持って行ったが、この日も買うものはいない。娘が、思い嘆いて、「このようにばかり日が重なる。我が両親の命も長らえるのが難しいだろう。どのようにしよう」と困っていたところ、道に（誰かが）お金を一貫落としていた。この娘が、瓫器をこの銭に結び付けて、瓫器の額を数えて銭を取って、残りの銭と瓫器とを、もとの所に置いて戻ってきた。

　さて、このこと〔＝道に落ちていた銭から、瓫器九つ分の対価を得て帰ったこと〕を語ったところ、父親が、とても驚いて言うことには、「何をしようとして持っていた銭であったのだろうか。親の物でもあっただろうか、ご主人さまの物でもあったに違いない。たとえ（銭を）取るにしても、一つの瓫器を置いて一つ分の額を取るべきだ。どのような者が、一人で瓫器を九つも買うことがあるだろうか。このように銭を落とした人の気持ちを思い遣ることができないような濁った心を持っているような者は、疎ましく思う。早く、（銭を）全部持って行って、もとの銭に貫いて一緒にして、ただ瓫器を取ってこい」と言う。娘は、行って見ると、この銭がまだあったので、もとのままにして、瓫器を取って戻って来て見ると、父も母も、ともに手を合わせて、頭を垂れて死んでいた。「ああ、悲しいことだなあ。私も生きていてもどうなるか、いや、どうにもならない」と言って、娘もそばに座って死んでしまったという。

（私は）これを聞きまして、しみじみとした気持ちが言い尽くしがたくございました。本当に、そのような心を持ってこそ、仏の道を願うことができるのに、私自身はわずかに仏道を学ぶようにはしているが、心はいつも濁りに染まっているとしたら、きっと仏・法・僧を欺く罪もあるだろう。（私の後世は）どうなるでしょうかと悲しくむなしい。この昔の三人は、今どのような菩薩となって、どの仏の国にいらっしゃるだろうか。「願わくは、私の心を憐れんで、一念ごと〔＝瞬間瞬間ごとに〕あの人たちと等しくなろうと思う心をお与えくださいませ」と、心の中で祈りました。

　それはそうと、この人たちの姿を、絵に描いて売っていると語り（それを聞き）ました。総じて中国では、このようなことはとても（賞賛する）思いがあって、その人達の没後も人徳を讃えるということがあるのだろうか。この日本の国では、そのような人の姿（の絵）は、買う者はまさかいないだろう。描いて売ろうとする人も、また稀であるに違いないのであろう。